

■正しく着用するためのポイント

シートベルトは、身体の4つの骨格（①鎖骨、②肋骨、③胸骨、④骨盤）に正しく沿うように着用することが大切です。

●肩ベルト

肩ベルトは、鎖骨の中央を通るように。肩ベルトの高さ調整機能（ショルダーアンカー）が付いた座席では、ベルトが首にかかるよう、高さを調整しましょう。

●腰ベルト

腰ベルトは、できるかぎり腹部の低い位置に沿うように。ベルトが骨盤の左右の腰骨をしつかり押さえられるように着用します。

●バックル

シートベルトのタング（金具）をバックルに差し込んだ後、いったん肩ベルトを横方向に少し強めに引いて、腰ベルトのたるみを取ってから、ベルト全体にねじれやよじれのないことを確認します。

●シートベルトを正しく着用しないと！？

乗員の命を守るシートベルト。しかし、正しく着用しないと、命綱どころか、かえってシートベルトが凶器になることもあります。写真のように、浅く座って腰の位置が前に出ているような姿勢では、肩ベルトが首にかかりってしまいます。この状態で衝突すると、前に飛び出す勢いで、頸部を傷める危険性もあります。また、腰ベルトも、固い骨盤ではなく、柔らかい腹部にかかってしまいます。柔らかい腹部では、衝突の衝撃に耐えられず、内臓を傷める可能性もあります。



■チャイルドシートは、ここをチェック

●ハーネスの高さ

子どものシートベルトでもあるハーネス。幼児用シートのハーネスは、子どもの肩の位置と同じか、やや高めにセットしましょう。



●ハーネスの張力

カチッと音がするまでバックルを差し込んでから、マニュアルアジャスター（調整用ベルト）を引いてハーネスのたるみをとります。



妊婦も着用したいシートベルト

妊娠中は、シートベルトがおなかの赤ちゃんを圧迫しそうなイメージがありますが、安全のためには、できるだけシートベルトを着用したいもの。正しい着用方法は、子宮の膨らみを避けてベルトが通るようにします。肩ベルトは鎖骨の中央を通るようにします。腰ベルトは恥骨付近のできるだけ低い位置までベルトを下げて、おなかの膨らみの下を通るようにします。通常の妊娠であれば、シートベルトを着用しても問題はありませんが、妊娠の状態によっては一概に言えないこともあります。その場合には主治医に相談するようにしましょう。



どう守る?
車内の安全

締めないで安全な席はない！

だから締めよう

後席シートベルト

後席では、シートベルトを着用しなくても本当に安全なのでしょうか。安全そうに見える後席…。実は、そこには大きな危険が潜んでいるのです。





後席乗員自らが傷害を負う。

後席シートベルト
非着用

正面衝突! そのとき車内の乗員は?

車が正面衝突すると、今まで走ってきた速度から、瞬時に時速0kmの状態となります。これが一次衝突です。その時、車はその場に急停車しますが、車内の乗員には、そのままの速度を維持し続けようとする力が働きます。これが慣性力です。慣性力は、例えば時速40kmの衝突時には乗員の体重の30倍以上になるとされています。

シートベルトを着用していないと?

その時、乗員がシートベルトを着用していないと、前方に激しく投げ出され、車内の構造物に激突てしまいます。これが二次衝突です。シートベルトやチャイルドシートは、この慣性力によって身体が前方に投げ出されるのを拘束し、私たちを二次衝突から守ってくれる装置なのです。なお、平成17年中に車外に投げ出されて死亡した後席乗員は51人ですが、うちシートベルトを着用していたのは1人だけでした。

■衝突後の車内の状態は?



後席乗員は、投げ出された慣性力によって、前席に激突していました。前席の背もたれには、後席乗員の脚部がぶつかった跡が白く残っていました。



被害は前席にも及びました。ドライバーは、後席乗員に背もたれごしに押し込まれ、シートベルトをしていたにもかかわらず、顔面をハンドルにぶつけました。

■こんなに低い後席の着用率

警察庁とJAFが合同で「シートベルト着用率全国調査」を実施したところ、前席に比べ後席での着用率がかなり低いことがわかりました。事故の際の衝撃は、前席でも後席でも同じです。上の写真からもわかるように、「後席は安全」という考えは誤解です。ドライバーは、自らを守るためにも後席の乗員にもシートベルトの着用を呼びかけましょう。

	0%	20%	40%	60%	80%	100%
運転者					92.4%	
助手席同乗者					80.3%	
後席同乗者				8.1%		

2005年10月調査



前席乗員に被害が拡大。

後席シートベルト
着用

後席シートベルトを着用していたから



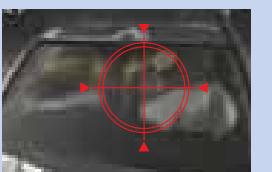
後席シートベルト、二つの必要性

シートベルト非着用の後席乗員は、車が衝突した瞬間、前方に投げ出されました。前席の背もたれに激突すると、天井などに激しく身体を打ちつけ、自身が激しい傷害を負ったと想像できます。それだけでなく、後席の乗員が背もたれごと前席の乗員を押し倒した結果、前席乗員は前方から時速約200kmで展開するエアバッグに守られることなく、ハンドルに顔面を激しく打ちつけたのです。

このように、後席乗員がシートベルトを着用していないために、前席乗員にまで被害が拡大する恐れがあるのです。このJAFユーザーテストからも、後席シートベルトの必要性が確認されました。

■チャイルドシートのハーネスも忘れないで!

後席でチャイルドシートに座っている子ども。ところが、ハーネスを締めないと、子どもは前席を通り抜けて、フロントガラスまで投げ出されてしまいました。車内に体をぶつけるだけでなく、車外放出の危険性もあるのです。



後席の乗員すべてがシートベルトやチャイルドシートを使用していたら、同じ条件で衝突しても前方に投げ出されたり、車外に放出されることなく、しっかりとその場にとどまることができました。すべての乗員がシートベルトやチャイルドシートを使用することで、はじめて車内の安全を守ることができます。